

火野葦平の〈戦争〉Ⅲ

——中国戦線からフィリピン戦線へ——

十二、レイシズムの高揚

フィリピン戦線における火野葦平のコミュニケーション能力はなぜ硬直しているのだろうか。それは「人類とか人間とかいふ言葉」で人間関係をみることの欺瞞を警戒し過ぎているからである。しかし人間を人間として扱うことをしなければ、「戦争」が終わっても、他者——それを「敵」といおうと「アメリカ人」だろうと——は他者として認めることができないだろう。他者を他者として認めない人間関係は非対称的でゆがんでいる。『コレヒドル要塞』に描かれたアメリカ人将校への態度にそれが表れている。火野の考える他者はアジア人にのみに開かれているように思われる。そういう意味では、この時期の日本人の多くがそうであったように、火野もまた真正正義の人種主義者であった。

フィリピン戦線の戦記・戦話・従軍記を読んでいくと、アメリカ軍がフィリピン兵を前線に配置し、自分らは後方で指揮を執ったことから、日本兵の多くは苛立ち、見えない敵への怒りをあら

わにした記述が目につく。敵でありながら、同じアジア人としてフィリピン人に同情し、卑劣なヤンキーの戦略に強い嫌悪感を抱いたわけだ。そのことについては「十一、アメリカ、アメリカ」の章で記述した。

ところで、火野は中国戦線で日本人によく似た中国人に出会うと安心する。フィリピン人に対しても、それが偶然のことだと分かっている。日本人の容貌との類似性をかぎとり寛容な態度をとろうとする。アメリカ人将校の赤ら顔をことさらに強調する対比の構造は鮮明である。上田廣もまたバターン戦線で投降したり俘虜となった茶褐色や浅黒いフィリピン兵の列の中に「私はひとつでもよいから白い顔を見たい思つた。」（『地熱』一四二・一四三頁）と書いている。そうした心理は、ジョン・ダワーのいうように「白」が「アジアを欧米の植民地主義の「白禍」から解放するというプロパガンダ」（『容赦ない戦争』斎藤元一訳、二〇〇一・一二二頁、平凡社）一二二頁の色彩象徴であり、当時の兵隊や報道班員に共通するものであった。上田は憎悪にくまどられたそのときの心境を次のように分析してい

石崎 等

る。

その顔が、どのやうな表情であらはれやうとも、若しあらはれたら、私は持つてゐるだけの声で罵倒し、場合によつては、飛びかかつてやらうとさへ考へてゐた。いや、自分自身が抑へきれないで、刀をふりかざすかも知れない。それでも飽き足らず、……と云つた具合に、私の憎しみの情は、いよいよひとりもゐないことがハッキリしたとき、極点に達した。私は彼等が、この戦線で、ファイリツピン兵を先頭にたててゐるやりくちが、東洋の全土に及ぼした醜悪なる手と同じであるを知つた。彼等は、つねに自己の姿をむきだしにすることなく、何者かを傀儡につかひ、如何にも人の好ささうな笑顔をつくつてゐるのだ。その実体をあかるみにひきずりださなければならぬ。(『地熱』一四七頁〜一四八頁、傍点引用者)

〈私Ⅱ上田〉は戦場において〈アメリカ人〉に遭遇することはなかつた。バターン作戦が終了し、降伏した〈米比軍〉の数万ともいわれる俘虜の行列の中に、多数の〈アメリカ人〉が圧倒的な存在感をもつて登場してくる。(『私』は日本の兵隊たちとともにトラックの上からすれ違いざまに俘虜の群れを見て、一瞬(『みなごろし』)の殺意を懐く。しかし上田は、そのときの複雑な感情をまともに対象化することができなかった。思考形態が近い火野もまたそれに近かつたといえるかも知れない。しかも行文の分かりにくさは、上田の筆癖のせいばかりではない。ファイリピンが四〇年以上もアメリカの植民地下にあり、そこを舞台に戦争が行なわ

れていたからである。公平な観点から記述された歴史書として信頼性の高いジョン・ダワーの『容赦ない戦争』には次のように書かれている。

④日本は南アジアの独立国は侵略しなかつた。日本が侵略の対象としたのは欧米人たちが代々支配し、そこにおけるアジアの被支配者たちに対する彼らの人種的、文化的優越性がなんら疑いなく当然のことと受けとめられていた、いわゆる植民地であつた。日本がアジアにおける強大国として台頭するのは欧米諸国に比べはるかに遅れ、それが頂点に達するのは一九四一、四二年のあの容赦なき「南進」の頃である。したがつて日本は、ただ単にそこにいる欧米人たちに対してばかりではなく、何世紀にもわたつて欧米の拡張を支えてきた白人優越という神話全体に対しても挑戦することになつたわけである。これは日本人にとつても、危機に直面した欧米植民地にとつても、また政治的、経済的、文化的に虐げられたアジア人にとつても、どこから見ても明白なことであつた。(『三六頁〜三七頁、傍点引用者』)

⑤長い間英米の植民地であつたビルマとフィリピンは、一九四三年日本により名目上の独立を与えられた。占領下にあつたインドネシアものに独立国となつた。もつともその後すぐに終戦となつてしまつたために、権力の移譲はうやむやな形のままとなつてしまつたが、四三年の大東亜会議は、汎アジアの理想主義とアジアにおける白人植民地支配の終焉のシンボルとして計画されたものであつた。結局は中味のない形ばかりのものであつたが、アジアの側には民族的夢を、西洋側には民族的脅威

をかき立てたのである。(三八頁)

火野と上田が従軍した戦争の状況に該当するのは④であり、ダワーのいう〈何世紀にもわたって欧米の拡張を支えてきた白人優越という神話全体〉への果敢な挑戦を背景にしたものであった。

そして⑤に語られているように、日本の勝利は〈汎アジアの理想主義とアジアにおける白人植民地支配の終焉〉つまりに日本を盟主にしたアジア全域の〈攘夷〉の敢行を目指すものであった。

一九四一(昭和一六)年二月八日、〈速ニ禍根ヲ芟除シテ東亜永遠ノ平和ヲ確立〉するという「詔書」が発せられた。それ以降、かつての〈良心的な〉総合雑誌の『中央公論』や『改造』にも、ダワーが指摘したような目を疑うばかりの論文が多く掲載されるようになる。日本の言論の方向は、〈欧米〉の歴史観を否定する〈近代の超克〉論と皇軍による〈南進〉の正当性に絞られていった。

初期フィリピン戦において、日本軍の電撃的な進攻作戦に対応できず、マニラ市内からの撤退を余儀なくされたマッカーサーの〈アメリカ〉は、バターン半島のナチブ山(標高一二八八m)・サマツト山(標高五八六m)・マリベレス山(標高一三〇〇m)の密林山岳に堅陣をしき、兵を集結して立て籠もり、日本軍を迎撃する作戦をとった。一九四二年一月一日、日本軍の作戦は周到緻密な準備のもとに三方から行なわれ、まず要衝バランガを陥落させ、ついで戦史上まれにみる激戦を経て四月一日に終了した。〈米・比連合軍〉はバターン半島の密林山岳を人工的に要塞化したナチブ・ライン、マリベレス・ラインという防壁線を守り

きれず、砲撃戦と肉弾戦によって降伏するに至った。さらに五月五日の夜に始まった敵前上陸作戦によって、難攻不落を誇ったコレヒドール要塞はわずか一二時間の戦闘で白旗が掲げられ、マッカーサーの〈アメリカ〉は〈民族的脅威〉にさらされたのである。そしてマニラ市内には、W A R I S O V E R のアドバールンが高々と揚がり、ルソン島での戦争は終結した。

兵隊たちはバターン山岳戦でジャングルを切り拓き、握り飯と梅干という食事に耐えながら〈汎アジアの理想主義とアジアにおける白人植民地支配の終焉〉(ダワー)という大義の実現のために進軍を重ねてきた。上田はいつまでたっても〈アメリカ兵〉と遭遇しない戦争の実態に違和感を抱いていた。しかしその〈敵〉はようやくその正体を現わしたわけだ。

このまま済ましてしまへるものであらうか。多くの味方の犠牲と、ながい間の労苦の回想が、それを激しく否定する。それならどうしたらよいか、うしろから射撃して、みなごろしにしてしまふか、それとも……いやすでにそれは出来ない。彼等がここまでやつてくるまでには、多くの日本兵にも会つてゐる筈だ。その日本兵が、おそらく歯ざしりして見送つたであらうやうに、私たちがまたさうするよりほかに仕方がない。私たちは日本人である。いついかなる場合も日本人である。そして日本人である、と云ふことを、その瞬間くらゐ尊く、美しく感じた記憶を、過去に私は持たない。それは何と切ない誇であつたらうか。(『地熱』一九二頁、傍点引用者)

《私》が懐いた錯綜した感情は一体何といふべきか。投降した俘虜の扱いを規定したジュネーブ条約を知らなかつたわけではないだろう。(いついかなる場合も日本人である)という確信は、《アメリカ兵》が《多くの味方の犠牲と、ながい間の労苦》を与えた《悪》であつたとしても、報復することに耐えなければならぬということである。それは敗者に対する寛容や慈悲の精神による許しではない。ここには《日本人》としての優越感情がかるうじで復讐心をコントロールしている姿があり、《敵》に対する日本人のもつ美しさが《切ない誇》として強調されている。兵隊の心に内攻した復讐心は集合意識として《バターン死の行進》の悲劇を用意していなかつたであろうか。しかし『地熱』の作者の眼はその後を追いかけることはなかつた。

日露戦争の時代、日本とロシアの将兵は戦闘の間、互に相手を尊敬したと伝えられている。約四〇年後、もはや敵と味方を超えた古典的ともいえるそうした良質な人間関係は失われている。

とするならば、バターン作戦終了(一九四二・四・一一)後、南方軍総指揮官本間雅晴が率いる第一四軍の次の目標はアメリカ兵によつて固められていたコレヒドール要塞の攻略に絞られ、上田廣的な《憎悪》と《侮蔑》が発露されるときを待たなければならぬ。フィリピンにおけるアメリカの中枢司令部を崩壊させなければアメリカ軍を降伏させることはできないという信念は現実のものとなるだろう——一九四二年四月九日、キング少将は降伏したが、アイブス代将が無条件降伏を申し出た際に、彼はバターン半島にのみ限定するものと主張した——し、陥落が成功すれば、日焼けしたアメリカ人の《トマトのように赤茶けた顔》ある

いは白人種特有の《白い顔》は白日のもとに引きずり出され、《白人種の暴戻》(澤村勉『コレヒドール要塞』)が告発され、《粉々にうちくだかれたアメリカ民主主義》が《もだへ狂ふ死の舞踏》(同)として嘲笑をもつて眺められ、《人道主義の仮面》(尾崎士郎『俘虜』)は引きはがされることになるだろう。

ここで、宣撫活動と敗残兵の投降に協力する三人のアメリカ人捕虜将校が日本人の血が流れるフィリピン女性によつて侮蔑されるという異色の作品『ルソンの雨季』に言及しておきたい。この小説は火野のフィリピン戦線に取材した二つの短篇集『敵将軍』(バタアン戦話集)と『南方要塞』のうち、後者に収録されている。初出原題は『雨季』であつた。

『ルソンの雨季』には多分にフィクションが入っていると思われる。一九四二年六月以降、フィリピンでの戡定作戦が終了したにもかかわらず、日本軍に帰順しない多くのフィリピン兵がいた。アメリカ軍とともに戦つた彼らは、日本軍を信頼せずマッカーサーが帰つてくるといふ考えを抱いていた。投降したアメリカ兵もいつか反攻して最後の勝利はアメリカにあるという信念を崩そうとはしなかつた。《私》は北部ルソン地区モシリオという町を舞台に展開された投降工作特別任務隊に同行する。敗残兵狩りには隊長の高田中尉指揮のもとに捕虜のアメリカ人将校も協力させられた。高田中尉は町民に《大東亜戦争の意義、日本の真意、比島の更生のためには日本と協力するのが唯一の道である》と強調した。将校たちには投降命令を下しアメリカ軍の再上陸などありえないことを町民の前で話すことを約束させた。末端は、正式な行政組織ができるまで、高田中尉を長とする日本軍が警察・行政す

べてにわたり支配権を握っていた。(私)は報道班員だが参謀格でもあった。その小さな組織に日本人とイゴロツト族の混血娘である川崎美史が参加していた。彼女は復讐心から奔放に振舞い、三人のアメリカ人将校へ侮蔑的言動をあらわにする。隊長も(私)もそれを抑えることができない。フィリピン名でタワイイモと名乗る彼女には日本人の血が流れており、長い植民地統治下、(日本)〈アメリカ〉(フィリピン)という複雑な(敵・味方)の關係が縋い合わされていたのだ。作者の意図に反して、(タワイイモ＝川崎清子)という存在そのものがフィリピンの悲劇のメタファ一となつている。

十三、〈真珠〉を手にしたのは誰か——比島戦記異聞

木村毅の『マニラ紀行 南の真珠』(一九四二・一〇、全国書房)は優れた学問的な調査と好奇心とジャーナリズム精神に裏打ちされた興味深い本である。日本とフィリピンとの歴史的な關係を考ふる上でも、またフィリピン諸島を舞台にした日米戦争を考察する上でも貴重な文献である。良い意味でも悪い意味でも、フィリピンの独立国家としての将来像がトレースされているからである。しかしいわゆる(戦記物)ではない。その文章は、秤の右の針に触れば大きく右に傾くが、左の針に触れば同様に左に傾くという柔軟でバランス感覚のある視点でとらえられている。

〈イギリス帝国の寶石〉と称されたインドをまねて、木村はフィリピンを(日本帝国の真珠)と想定したのであろう。火野葦平も自作の少年小説を『真珠艦隊』(一九四三・七、朝日新聞社)

と命名する。

〈戦記物〉には当然のこととして、被害を受けた現地の住民を思いやる兵隊の気持ちなど書かれていない。あつたとしてもそれはわずかである。兵士は(敵)を打ち負かすことが本業だからだ。もし日本軍および日本兵に対する憎しみが加速したとしたら、それは敵同士戦い合った兵士よりも、平穏な日常生活を破壊され、家族を引き裂かれ、軟禁生活を強いられた人たちであつたのではないか。

日本軍による占領の初期、マニラ市民にとって、硬軟の使い分けられた権力のまなざしは私生活を侵犯し自由を奪つたであろう。今までの法は無化され、書類の形式も改変されたことだろう。元来、のんびりとした風風を好む市民は、新支配者への忠誠を示しながら空息感を懐いたことだろう。また教育体制はそのままだとしても、一九四〇年六月一九日、タガログ語が国語として決定されて以来、公立・私立の学校ではタガログ語が使われてきた。しかし英語とスペイン語が公用語であつた關係上、日本語が主要言語となるにしても、両言語を敵性言語としてその使用を禁ずることは難しいことだつた。いやそればかりではない。担い手の教師の手配、諸行事の形式など予想できない問題が山積していた。マニニアルを作り、特殊な成功例が範例として示されても気が遠くなる作業が国家という名のもとに遂行されなければならなかつたからである。

〈戦争〉は敵対意識と憎悪をむき出しにする。ヒューマニズムの重石の重い国民とそうでない国民。フィリピン諸島のような国を舞台にして戦争が行なわれた場合、新支配者日本人に対する

フィリピン国民の意識は違ってくる。兵隊のみならず軍政部・報道班員などでは対応が難しかった。何しろ（七千余の島に、七十余の民族からなる比律賓）（木村毅）——最近では一〇〇余りの言語・民族集団といわれている——だから、文化政策ひとつをとってみても一筋縄にはいかない。木村の文章はそうした複雑な国情に分け入って的確な問題提起を行なっている。ただ戦時下だったために、真実、うわさ話、意図的な捏造つまりガセネタに類する情報が錯綜し、その分別に難しい点があった。木村はつとめて取材にウラをとっている。分らないと、図書館に向くなり文献などによって確かめる努力を怠らない。たとえば、バターン半島はアメリカ軍の砲兵隊の演習地だったこと、コレヒドールはアメリカ陸軍の要塞のために報道が禁じられていて分からないことが多いこと、バターン半島には七不思議があること、川がないのに良質の清水があることなどについて、疑問解明のため情報収集を怠らなかつた。その点が『マニラ紀行 南の真珠』をユニークなものにしている（「バターン半島とコレヒドール島」¹⁶）。多く書かれた〈戦記物〉では、そうしたことを目を向ける余裕などなかつたからだ。

日本軍のマニラ入城によって、市民は肌身を汚されたような思いにかられ、息を潜めて進駐の動向をうかがい外出を控えていた。ルソン島だけでも南部のバターン半島では激戦が継続中であり、コレヒドール島とは触発の状態にあった。

マニラ入城から一〇日で英米人はサント・トマス大学に軟禁された。ということは、市内にいるのはそれ以外の外国人ばかりであった。それは木村が面会した人物を見ても明らかである。一部

の親的な市民や英米人以外の外国人は自分達の利権を拡大するチャンスとみて跋扈した。あるいは英米人の財産保護を依頼されて四苦八苦していた。そうした人物でも反日をあからさまに標榜することは稀であった。さまざまな面で日本への協力は困難を極めた。

アメリカ軍の撤退にともなう破壊された放送網施設は、佐坂正平報道班員と村上技術部員の奮闘的な努力によって超スピードで復興されるが、それに協力した人物はザヴァテロというマニラ在住反日イタリア人であった。彼はイギリス人富豪に頼まれて隠匿した宝石の窃盗詐欺事件を起こして逮捕されたが、放送局再興に協力したという理由で放免されている。また協力を期待されアウンサーとして採用されたパンレリオ・イエーという女性記者もまた疑惑の人であった。彼女はアイルランド人の父とフィリピン人の母との間に生まれた混血で、アメリカで教育を受けていた。木村は（放送局を利用して、コレヒドールに対して対敵通牒をしようとしてゐなかつたのだとは云へない）（「マニラ放送局占領顛末」¹⁷）と書いている。このときコレヒドールはまだ陥落していなかった。

このように、初期統治下のマニラの圧倒的な反日的な空気の中で、親日を貫くことは困難であった。進攻が成功した土地での文化政策の策定はどれも同じであった。一、ラジオ、二、レヴェュー、三、映画、四、新聞、五、教科書を決定し何をどう教えるかという教育の問題、六、宗教政策が当面の課題であった。一から四までについてはいちいち検閲を加える。木村は放送を中心に文化工作を担当したわけだが、その難しさは「マニラ放送局占領顛末」

と「文化工作の現状」という文章に詳しく報告されている。アメリカ統治時代、ラジオはニュースと娯楽番組を伝える主要メディアだった。映画は庶民最大の娯楽であったが、上映された多くは享楽と慰安のためのハリウッド映画であった。

そうした中、木村が紹介している親日論客のピオ・デュランは異色の存在であった。彼はマニラ在住の弁護士だがすでに『フィリピン独立と極東問題』という著作を公にしている。フィリピン大学法学部教授であったが、本の出版がアメリカの忌憚に触れて発売禁止となり職を剥奪された筋金入りの人物である。英語で書かれたこの著作をマッカーサーとその側近は詳細に分析していたことであろう。木村の文章に引かれているデュランの経論のさわり——これは木村の翻訳だろう——は次のようなものである。

かりに一步を譲つて、日本は本当に比律賓を自国に併合しようとしてゐると仮定する。だが白人諸国には、武力に訴へて、比律賓の併合を防いでくれる決心のついてゐる国はない。いや、さうした国が一つ二つあるとしても、が、実際問題として日本を抑へるだけの軍備を、現在でも、将来でも持たぬではないか。さうすると、白人諸国にたよつて日本に敵対するより、日本にたよつてその保護を願ひ、友誼を求めめる方が、政治家としてとるべき賢明な行為である。更に議論をすゝめて、日本の比島進入を防げる武力があるとしても、それをたゞで、無代価で動かして、くれる筈はない。(……)吾々同胞は白人諸国に忠誠をつくすことを義務とするより同じ東洋の国家の統治下にある方が、寧ろ幸福である(……)(傍点引用者)

一九三五年二月、フィリピン独立がアメリカによつて約束されたときに出版されたこの本は、明らかにアメリカの動きを視野に容れた政治性の強いものである。デュランの考える「日本」のイメージは真珠湾攻撃以前のものであるために、新統治者である「日本」のイメージと同じであるかどうかは分からない。日本の進攻以後の日米比三国の複雑な関係後もデュランがこうした考えを持つていたかは定かではない。一九〇二年以来、アメリカは植民地統治国として君臨し、それは三〇年以上も続いてきたわけである。並行して、日本は日露戦争に勝利し、東南アジアにおける国際的・地政学的地位を確立してきた。フィリピンが置かれている地政学上の地位からいっても「白人諸国」の統治の実態に疑問を懐く愛国者が多くなつてきても不思議ではない。にもかかわらず、フィリピンにおけるアメリカの役割は大きなものであったことは否定できない。

そう考えると、デュランの文章には、代価を求めることなく、無償の行為として保護と援助の可能性があるのは日本であり、日本の「保護」と「友誼」を期待すべきだというメッセージがこめられている。アメリカ統治下にあつては真の「自由」はなく、「独立」を保証してくれるなら日本を盟主とする大東亜共栄圏の傘の下に入つて守つてもらふほうがよい、という挑発的ともいえる考えがこめられている。しかし見方を変えれば、デュランの言説には両義性があり、単純な日本期待論ととるべきではないだろう。私は、裏にはマッカーサーに本気を起こさせ、統治国アメリカの軍備拡張を待望する期待がかけられていたと推測する。なぜア

リカがデュランの本を危険視したかが分かる気がする。デュランの言説はアメリカにとってアキレスの踵だったからだ。

しかしデュランの考えには、旧侵略者が新侵略者によって駆逐されようとするとき、そこに〈戦争〉が起こりうるという発想がない。その逆も起こりうるという力学がない。フィリピン独立運動を担ってきた知識人や学生がどちら側につくかという考察も〈戦争〉がいかに国民に災禍をもたらすかという危機意識も稀薄である。

デュランの『フィリピン独立と極東問題』が時局性の強い書物であったかは、一九四五年八月一日、日本の無条件降伏によって明らかになる。なぜ正義の御旗をかけた皇軍がフィリピンに進攻し、約三年にわたり統治しながら、マッカーサーの反攻を受け苦境に陥ったとき、日本側について協力し徹底的に戦おうとはしなかったか。それは日本がアメリカ以上に専制的な支配者として振る舞ったからにはかならない。デュランの夢は日本軍国主義とともに潰え去ったといえるだろう。

十四、マッカーサーの部屋

『マニラ紀行 南の真珠』の中にあつて「マッカアサアの室」は異色の文章といえる。そこには木村のヒューマニズム精神が発揮されているからである。

木村毅は大阪毎日新聞特派員、航空本部の派遣員として二ヶ月間の任期でマニラに赴き、ベラルタ・アパートメントに宿泊した。そこは放送局派遣員の拠点となっており、そこから日本への送信

がうまくいかなかったので、録音したものをマニラから東京に送って放送された。木村は「私のは復興マニラ市の感想で、火野〔葦平〕君のはバターンの戦況」だったと記している。²⁰⁾

マニラホテルは軍部の要人、ベイ・ビュー・ホテルは軍政部員・報道班員（徴用文士・ジャーナリスト）ら三〇〇人によって占領され宿舎となった。

一九三〇年代、アジア各国で独立運動が燃え上がりつつあった。一方、帝国主義による世界の分割再編競争が熾烈を極めていた。かつてのフィリピン独立運動の父であるアナギルド將軍は七三歳を迎え、キャビテ市の私邸に隠棲していた。日本軍の空爆によってフィリピン第一の空軍基地であるクラークフィールドは破壊されたが、マッカーサーによる軍事施設の完成がもう少し早かったなら、戦局はどう傾いていたか分からなかった。飛行機の多くは破壊されたが、未完成ながら新築兵舎は残されていた。

マッカーサー陸軍大將は日本軍のマニラ入城の直前まで、マニラホテルの五階の全フロアーを使用してアメリカ軍フィリピン総司令官として指揮を執っていた。マニラを制圧した日本軍は一九四二年四月三日、本間雅晴第一四軍指揮官をもとに増強部隊の支援を得てバターン半島第二次総攻撃を開始する。日本の総兵力は約五〇〇〇〇人、米比軍は約八〇〇〇〇人と避難民であった。一週間の激戦のち、四月九日、エドワード・キング少將はコレヒドール要塞をのぞくバターン半島全域の降伏を申し出る。アメリカ軍將兵六七〇〇人を含む七〇〇〇〇人を超える米比軍が捕虜となる（うち軍兵士約五〇〇〇〇人、残りは避難民）。捕虜は半島南端のマリベレスからサンフェルナンドまで徒歩で移動させられ

た。いわゆる極東軍事裁判で問題視された〈バターン死の行進〉である。

こうした背景の下、一九四二年四月一九日、オーストラリアに撤退していたマッカーサーは連合軍西南太平洋方面司令官に就任する。同年一〇月三日、米統合参謀本部はマッカーサーに一二月二〇日までにルソン島に進攻する命令を下す。

一九四四年一〇月二三日、マッカーサーはレイテ島に上陸し、「私は帰ってきた」と放送し、約束通りフィリピンに帰還する。同時に、オスマニア大統領のフィリピン政府設立を宣言する。

数年後、マッカーサーがコーン・パイプを啜えて厚木飛行場に降り立とうとは木村も予想しなかったことだろう。俺の不在中、部屋を覗き見て記録を残したのは一体誰か。——禁を犯して特権的にマッカーサーの部屋を視察した木村の耳には、そんな脅迫的な言葉がささやかれたことであろう。しかし木村の文章はマッカーサーに対して努めて好意的であった。

いったん時計の針を戻せば、一九四一年一二月二四日、日本軍の攻勢を知って、アメリカ極東軍司令官マッカーサー大將はマニラからコレヒドール要塞に撤退した。東條英機首相が、大東亜戦争指導要綱を発表し、フィリピンとビルマの独立を認める声明を出してから三日後のことであった。翌年の三月一日、バターン半島の劣勢を認識したマッカーサーは妻子・幕僚らとともに魚雷艇（一説、飛行機）で三ヶ月半いたコレヒドール島を脱出した。その後要塞を守ったのがウェインライト少將であった。

十五、日本／アメリカ／フィリピン——『コレヒドール島』

火野の『コレヒドール島』は「海龍丸」「廃墟」「墓標」「月明」「軍艦島」の六つの章に分かれている。「海龍丸」から「月明」までは一九四二年一月の『改造』に発表され、「軍艦島」はその続編として翌年一月の同じ『改造』に発表された。上田廣の『緑の城』が地上戦を描いた作品なら、火野の『コレヒドール島』は難攻不落とされた海上に浮ぶ要塞コレヒドールをめぐる攻防戦を視野に容れた紀行文的随筆である。この戦いに参加できなかった火野は、兵隊の伝聞に加え、廃墟と化したふたつの大小の要塞島を見学することによって〈戦争〉を語り〈日本兵〉を語り〈アメリカ〉を語ろうとしたのである。

この作戦には上田廣君や柴田賢次郎君が従軍したのであるが、彼らが上陸したときには敵味方の屍體が墨々として足の踏むこともできなかつたといふことである。それはこのあたりであらうか。伝説の島であつたコレヒドール島への敵前上陸がすでに死と同じ意味であることは、上陸前の誰の胸にも苦しいばかりに自覚されてゐたのである。しかも、誰ひとり、ためらひ躊躇するものはなかつた。死をただちに勝利と誇り得るやうな日本兵の精神のみが、この決意に到達し得たのである。死が、敗北を意味するものでなく、肉體の死によつてはなにもものも亡びず、死によつて生き、死によつて高められ、死によつて大君と祖国に貢献するのである。死ぬことがただちに勝利であると

の精神によつて疑ひもなく日本は支へられ、これからも支へられてゆくのである。〔南方要塞〕一四四頁〜一四五頁、傍点引用者)

火野がバターンの戦勝報告を国内に向けて放送する仕事でマニラに戻り、そのままマラリアに冒されて入院し、バターンに戻れないうちにコレヒドール要塞は陥落してしまつた。一九四二年四月二十九日に始まつた総攻撃は、五月五日に敢行された敵前上陸作戦の成功によつて、五月六日、立て籠もつていた司令官ウエインライト少将が降伏してしまつたからである。この作戦には中国戦線で兵士としての体験歴がある上田廣と柴田賢次郎が参加した。二人は決死の覚悟で遺書を火野に託していた。

二人は無事に生還したのだが、それにしても火野の高揚ぶりはどうしたことだろう。バターンやコレヒドールの戦闘にかぎらず、死を省みず勇猛果敢な兵隊が多きうたことは確かである。そして日本の軍隊に火野が指摘するような死の美化が深く浸透していたことも事実だろう。しかし死を美化し〈死の哲学〉を心の片隅につねに置きながら、その一方、貪欲に生きて帰るという〈生の哲学〉もまた否定できないものであつた。〈敵〉の存在が明らかかな戦場では武勲と名譽はつきものだが、〈死の哲学〉はそう容易に合理化できるものではない。火野の文章には純粹ともいえる勝つことへの情熱と願望が溢れている。

〈死ぬこと〉が〈勝利〉でなくなつたとき、あるいは〈死ぬこと〉が〈勝利〉とはほど遠いと認識されたとき、あるいは〈死ぬこと〉と〈勝利〉が無関係と判断されたとき、〈戦う〉ことはど

のような意味があるのだろうか。火野の〈戦争哲学〉と〈死の美学〉の危うさは、そのまま大岡昇平の〈俘虜記物〉の根幹へとわれわれを導く。大岡のアメリカ兵を撃つか撃たないかという〈問の構造〉は火野の考えと激しくぶつかる。大岡は俘虜となることを恥じようとはしなかつたし、戦場では自分のエゴイズムをもてあました。『俘虜記』のエピグラムに掲げられた歎異抄の一節「わがこゝろのよくてころさぬにはあらず」には、そのような複雑な心理が込められている。火野は兵隊の自我を認めなかつた。自我は〈死ぬこと〉と〈勝利〉の前に滅却しなければならぬと考えられていたからである。火野の辞世吟は、「火をもてる蛍灯に来て死ににけり」というものだが、二人の文学者の生と死に対する方向性はまったく逆を向いていたといえるだろう。

コレヒドール攻略作戦に参加できなかった火野はすでに兵士ではなく報道班員であつた。いかにその戦争哲学が鋭く、死の美学が人を酔わせるとしても、〈戦争〉の傍観者に過ぎなかつた。数百名のアメリカ兵が日本兵の監視下、俘虜として上半身裸となつて島の跡片づけと復旧に汗を流して働いていることも〈戦争〉の生々しい現実であつた。彼らの敗北の要因について、死を賭したかそうでなかつたかというところで計量することなどできない。ましてや勝者として嘲笑することなどできないだろう。〈死ぬこと〉が〈勝利〉を導き、日本の〈新鮮にして莊重なる歴史をつくつてゆく根源のもの〉(『南方要塞』一四五頁) だとしても、その未来は不定である。大岡昇平の眼はそこまで見通していたがゆえに、戦後完本『俘虜記』に結晶していく密度の濃い〈俘虜記物〉を営々と書き継ぐことができたのである。

一九三七（昭和一二）年、火野は『文学会議』一〇月号に発表した『糞尿譚』で同年下半年期の芥川賞を受賞した。火野は賞の伝達のために上海にやってきた小林秀雄と対面し、〈戦争と宗教と戦争心理とまごころ〉の話をしたことを『麦と兵隊』（一九三八・九、改造社）の中で書き留めている。その回想は、徐州会戦における孫圩城の激戦で次々に斃れていく兵隊の運命を前にして、生命と死の問題に深甚の思いをめぐらす個所に挿入されている。フイリピン戦線にあつては報道班員の身分であり、戦争慣れしていたためか、孫圩城のときほどではなかった。しかし敵兵を憎む感情はアメリカ兵を意識したとき露骨なまでに高揚する。それはアジア人とアメリカ人に対するレイシズムの温度差の表われとみてよいだろう。火野は小林と語り合った〈戦争心理とまごころ〉の問題を深めようとはしなかった。いやむしろ、敵への憎悪によって〈戦争心理とまごころ〉が隠蔽され、アメリカ兵への敵愾心がむき出しになったように思われる。

上海での対談から一〇年後、小林は復員してきた大岡昇平が戦争体験を書こうとした際に、表現は違うがほぼ同様のことをアドヴァイスした。²² 火野がフイリピン戦線の渦中で喪失していった分、大岡は同じフイリピン戦線での戦闘と俘虜体験を通じて〈戦争心理とまごころ〉のテーマを正面から追求していくことになる。

ところで、注（15）で記したように、安田貞雄に「虜囚記」という文章があり、そこに面白いエピソードが披瀝されている。キャンプ・キスレーの捕虜収容所に収容されていた米兵のミッチェル聯隊長は安田と親しくなり、遊びに来たとき何か読みたいというので、岡倉天心の『東洋の覚醒』を見せた。彼はバラバラとそれ

をめくり、〈東洋の静かな凝視を白禍に対して向けようではないか〉という一節に目を留め、〈白禍〉の意味が解らないといい、〈日本とアメリカとの間に理性をもつて解決できぬやうな難問題はないはずである〉と述べる。安田は日本が最善を尽くしたのにあなた方はそれを拒絶したからだと反論すると、そんなことは（ルースベルト大統領にきいてもらいたい）と答え、『東洋の覚醒』を拒否して英訳の『ボヴァリー夫人』を借りていったということだ。²³ 日米二人の関係が立場を変えたとき、こうした会話を想定することは考えられるだろうか。ここにはコミュニケーションが成立している。一考に値するエピソードではないか。戦場という過酷な状況の中にあつたとしても、上田や火野が体現し、表現しなければならなかつた狭隘なレイシズムからは生まれてこない人間観だつたといえるだろう。安田がどのような人物か知らないが、〈欧米〉の歴史観と〈近代の超克〉論議に象徴される日本の支配的な言説を対比的に考えようとするとき、こうした証言は、殺伐とした戦記物の中では貴重な宝石のようなものに感じられるのは、私の感傷だろうか。

注

（14）比島派遣軍報道部編『比島戦記』（一九四三・三、文藝春秋社）一六一頁。

（15）文化奉公会編『大東亜戦争 陸軍報道班員手記 従軍随想』（一九四三・六、大日本雄弁会講談社）一三頁。なお、この本には、フイリピン戦線に関して、尾崎士郎のほか、三木清「比島人の東洋的性格」柴田賢次郎「次代を築くもの」、上田廣「協

力者」、向井潤吉「マニラの陋巷」、安田貞雄「虜囚記」の六篇が収められている。

(16) 『マニラ紀行 南の真珠』一二〇頁～一三四頁。

(17) 『マニラ紀行 南の真珠』二一四頁。

(18) フィリピンはカトリック教信者が多くを占めているために、日本からカトリックの神父が派遣され、戦後の宗教政策が遂行された。

(19) 『マニラ紀行 南の真珠』二八五頁～二八六頁。

(20) 『マニラ紀行 南の真珠』二五〇頁。

(21) 雑誌『改造』(一九三八・八)では一七三頁下段、単行本『麦と兵隊』では一四六頁。

(22) 小林秀雄は「あんたの魂のことを書くんだよ。」と述べたと
いわれる。若干ニュアンスは違いますが、このことに関しては「大
岡昇平の〈戦争〉Ⅲ」(日本大学大学院芸術学研究所文芸学専
攻『藝文攷』第二号、二〇一六・二・一五)で言及した。

(23) 前出『大東亜戦争 陸軍報道班員手記 従軍随想』七〇頁～
七一頁。

(いしざき ひとし 本学名誉教授)